様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １２ 日現在

機関番号：３８００２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２１０７

研究課題名（和文）IPV被害者発見尺度（DS-IPV）の有効性および有用性の検討

研究課題名（英文）Examination of practical use of the detection scale for intimate partner violence (DS-IPV)

研究代表者
新城　正紀（Shinjo, Masaki）

沖縄大学・健康栄養学部・教授

研究者番号：５０２４４３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：親しい人からの暴力（IPV）の被害者発見尺度(DS-IPV)の有効性について調べた。有用性の確認は、既に有効性が確認できている既存の尺度との相関を調べることにより確認する。
既存の尺度は、「女性に対する暴力スクリーニング尺度（VAWS）を用いた。VAWSを日常診療に使用しているA母子医療センターに調査を依頼し、354件の調査票（DS-IPVおよびVAWS）の収集を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
親密なパートナーからの暴力（IPVという）の問題は、複雑・多岐にわたる課題であり、問題解決のためにはその要因を探り適切に対応する必要がある。科学的根拠に基づいたIPV被害者発見および被害内容や被害程度の把握は、IPVの問題解決のために最も重要な要素である。
IPV被害者の中には、自ら受けている暴力を認識できない者や第三者に説明できない者がいる。IPV被害者は、われわれが開発したDS-IPV（質問票）に記入することにより、自ら受けている暴力を認識でき、第三者に説明する手がかりを得る可能性がある。また、支援者は暴力を早めに把握し、支援や連携に繋ぎ、適切な対応を行うことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：We developed an early detection scale for intimate partner violence (DS-IPV) in 2014. We confirm the efficacy of the scale by criterion-related validity which was used correlations to compare scores from two instruments (DS-IPV and existing scale).The existing scale that we used for a comparison was the Violence Against Women Screen (VAWS) that has already established validity.
2019, we asked a research to a maternal and child medical care center which has been using VAWS in everyday medical practice. We collected 354 questionnaires (DS-IPV and VAWS) by the end of March, 2020. The research will continue until 1,000 questionnaires will be collected.

研究分野：公衆衛生学、疫学

キーワード：IPV　被害者発見尺度　基準関連妥当性　有効性　尺度開発　支援　連携　DV

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

IPV(Intimate Partner Violence、親密な関係者からの暴力)の問題は、複雑・多岐にわたる課題があり、その課題解決のためにはその要因を探り適切な対応、対策および取組みが重要である。科学的根拠に基づいた IPV 被害者発見、被害程度の把握は、IPV の問題解決のために最も重要な要素である。

申請者らは平成 25 年～27 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題：汎用性のあるドメスティック・バイオレンス被害女性早期発見尺度の開発）により DS-IPV を開発した。

申請者らは、DS-IPV 開発のために O 県に在住する 18 歳から 59 歳の女性 5000 人を横断的研究デザインで無記名自記式質問紙調査を実施し、IPV 被害女性に関連すると考えられる質問項目のうち、比較的早期に受けると推察される項目（26 項目：4 件法）について探索的因子分析および確認的因子分析を行った。各質問項目の得点は、ほとんどない：1 点、ときどきある：2 点、しばしばある：3 点、ほとんどいつもある：4 点とした。回収された調査紙 1915 件のうちパートナー有りの 1277 名を解析対象とし、探索的因子分析で 22 項目 4 因子が抽出された。抽出された因子は「不安喚起的要因」、「行動制御・抑制」、「威圧・脅し」、「日常的に抱く感情」で、Cronbach'α係数は、全体で 0.92 であり、全体の累積寄与率は 58.1%であった。また、各因子間の相関は、0.53～0.76 ($p<0.01$)であり、「不安喚起的要因」と「日常的に抱く感情」との相関（0.76）が最も高値を示した。確認的因子分析の結果、モデルは $\chi^2 = 1437.315$、$df = 203$、$P<0.001$、$GFI = 0.902$、$AGFI = 0.901$、$RMSEA = 0.069$　(90%CI [0.066, 0.072])で容認できる適合度を有していた。

2015 年 2 月から 3 月に O 県内保健所の配偶者暴力相談支援センターにおいて DS-IPV を用いた調査を実施したところ、3 件の回答が得られた。配偶者暴力支援センターの利用者は、IPV 被害者であり、DS-IPV 平均得点の分布は、2.3、2.5 および 2.9 点であり、3 件とも 2 点（「ときどきある」）を超えていた。また、「不安喚起的要因」、「行動制御・抑制」、「威圧・脅し」の項目では「しばしばある」、「ほとんどいつもある」との回答が多く、「日常的に抱く感情」の項目では「ほとんどない」との回答が多かった。DS-IPV を用いて相談に応じた担当者の DS-IPV の評価について、以下に述べる。「相手の IPV のタイプがわかる」、「暴力の内容等」、「被害の程度がわかる」、「口で言いにくいことも伝えられる」ということで、被害女性への対応に役立った。「時間の短縮になった」、「相談者に聞く内容をまとめられる」「口頭でも質問するため」ということで被害女性支援業務の負担軽減になった。「程度がわかる」、「尺度をもとに話を進めたので」ということで被害女性への支援に役立った。「この結果をもとに報告したので」関係機関との連携に役立ったとの回答が得られた。また、尺度についての自由記述では、「項目も少なく非常に的を射ている」、「簡潔でわかりやすい」などの記述があった。

よって DS-IPV は、被害者発見だけでなく、被害者への適切な支援にも活用できる可能性が示唆されたが、調査対象数を増やして DS-IPV の有効性および有用性の検討および確認が必要である。

また、看護職者が IPV 犠牲者のスクリーニング、同定、介入を改良・改善する態度の転換を行うような研究の必要性がある（Schoening AM, et al. J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2004）。カナダの各地に勤務する医師の 98.7%は配偶者からの暴力のケースを見逃しており、68%は 発見方法の知識を持っていない（聖路加看護大学　女性を中心にしたケア研究班/編、EBM の手法による周産期ドメスティック・バイオレンスの支援ガイドライン 2004 年版

2004)。女性の健康に及ぼす影響が危惧されるため、医療において DV（ドメスティック・バイオレンス）被害の早期発見に向けてのスクリーニング、介入、連携体制を整えることが急務である（片岡ら　日本公衆衛生雑誌　2005)。産褥期の女性に対する DV スクリーニングなどに用いられている女性に対する暴力スクリーニング尺度（Violence Against Women Screen VAWS　作成者：片岡、　以下、VAWS とする）は、偽陰性を少なくするように考慮されているため陽性的中率が低いことが課題である（長坂ら　母性衛生　2012)。

現在、IPV スクリーニングに用いられている尺度は、検出力や同定が十分ではなく、過小評価（underestimate）されていると考えられ、看護職者を含む医療関係者にも利用できる IPV 被害者発見尺度の開発が求められている。また、米国やカナダなどで用いられている尺度には、日本の文化や慣習に馴染まない項目（銃で脅すなど）が含まれているため、申請者らは文化や慣習を考慮に入れて DS-IPV を開発した。

IPV の健康被害は、外傷、うつ病、性感染症、流早産や低出生体重児の出生の産婦人科異常、慢性痛、消化器症状、喘息、高血圧や心疾患、ストレス症状など多岐にわたっている。また、世界的に共通して配偶者から身体的または性的暴力を受けた女性は、暴力を受けていない女性より自殺念慮や自殺企図の経験が多い（Mary et al. Lancet 2008）ことから自殺に繋がりやすい特徴もある。IPV 被害女性の発見・治療および予防・啓発について、保健医療従事者は、専門家、実践家としての立場から科学的根拠に基づいた関わりが重要である。しかし、医療機関、医療従事者の IPV に対する取り組みは遅れており、被害者、加害者への適切な対応が求められている。

医療機関や地域で IPV 被害の発見や効果的な予防・啓発活動などの対応を行うためには、まず、IPV を漏れなく発見し、適切に対応することが重要であり、そのための道具として IPV 被害者発見尺度が必要である。

DS-IPV が、IPV 被害者発見と被害程度を知り、被害支援のためのツールとして利用できるかについて検討する必要がある。本申請は、DS-IPV の有効性と有用性を確認するための、調査、情報収集および成果発表のために必要な研究費を得るためのものである。

２．研究の目的

本研究は、平成 25 年～27 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題：汎用性のあるドメスティック・バイオレンス被害女性早期発見尺度の開発）により開発した DS-IPV とするの有効性および有用性について検討することを目的とする。

具体的には、市町村、保健所、病院、警察、学校、地域、IPV 被害者支援団体、IPV 被害者相談機関等における DS-IPV の使用により有効性および有用性を確認する。また、IPV 関連の講演会を企画・開催し、参加者を対象に DS-IPV を用いた調査を実施して、有効性および有用性を確認する。

DS-IPV の有効性の確認は、既に開発されて医療機関などの利用されている「女性に対する暴力スクリーニング尺度（VAWS）との基準関連妥当性の比較（相関関係)、検討によって行う。VAWS は、開発者の承諾を得た実施した。

３．研究の方法

DS-IPV の有用性・有効性について調査の実施、検討、研究成果の公表を行う。

1) 調査対象者は、（１）市町村、保健所、病院、警察、学校、地域、IPV 被害者支援団体、IPV 被害者相談機関等の相談窓口の利用者および担当者、（２）IPV 関連の講演会への参加者とする。
2) 1)の調査で得られたデータを解析して、DS-IPV の有効性および有用性を確認する。
3) 質問紙に DS-IPV および片岡が作成した VAWS の項目を含め、DS-IPV の有効性お

よび有用性の評価を行う。

４．研究成果

平成 28 年度、平成 29 年度は、市町村、保健所、病院、警察、学校、地域、IPV 被害者支援団体、IPV 被害者相談機関等に調査依頼を行い、IPV 関連の講演会や研修会を実施して、DS-IPV と VAWS を用いた調査を行ったが、DS-IPV の基準関連妥当性を確認できるデータの収集ができなかった。

また、研究代表者が当該研究期間の平成 31 年 3 月 31 日付で早期退職し、異動（退職、再就職）することになり、研究の進捗が遅れ、当初予定の研究が得られなかった。それで、補助事業期間を 1 年間延長して、研究を継続することにした。

令和元年度は、VAWS を日常診療に使用している A 母子医療センターに調査を依頼し、令和 2 年 3 月までに 354 件の調査票（DS-IPV および VAWS）の収集を行った。この調査は、1,000 件に達するまで継続し、1,000 件のデータをもとに基準関連妥当性の検討およびカットオフ値の算出を行う。

令和 2 年 3 月 31 日に DS-IPV に関する論文（Development of an early detection scale for intimate partner violence to occur in relationships under power and contorol）を Japan Journal of Nursing Science に投稿したところ、令和 2（2020）年 7 月 6 日にアクセプトされた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Shinjo Masaki, Inoue Matsuyo, Akamine Itsuko, Naka Chieri, Tanaka Hideo	４．巻 -
２．論文標題 Development of an early detection scale for intimate partner violence to occur in relationships under power and control	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jjns.12369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 新城正紀、井上松代、赤嶺伊都子
２．発表標題 IPV被害女性の特徴および発見方法ー典型的な一事例からの考察ー
３．学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 井上松代、新城正紀、赤嶺伊都子
２．発表標題 DVに関する認識を高める医療者のための研修会開催とDVの認識度調査
３．学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 新城正紀、井上松代、赤嶺伊都子
２．発表標題 IPV被害者発見尺度（DS-IPV）を用いた被害者発見尺度および被害者支援
３．学会等名 第75回日本公衆学会総会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　松代 (Inoue Matsuyo) (30326508)	沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・准教授 (28002)	
研究分担者	赤嶺　伊都子 (Akamine Itsuko) (60316221)	沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・准教授 (28002)	